

聖書：コリント人への手紙第一 16：19～24

説教題：私の愛があなたがたとともに

日時：2023年4月2日（朝拝）

コリント人への手紙第一の最後の部分となりました。今日の箇所には宛先の教会への挨拶が記されます。まず書かれているのは「アジアの諸教会がよろしく」。今日、アジアと言うと私たちの日本を含む、この近くの地域を思い浮かべるかもしれませんが、これはローマ帝国におけるアジア州のことで、今日で言えばトルコ西部に当たります。その中心が、この手紙をパウロが執筆した町エペソでした。「アジアの諸教会」と言われていますから、エペソだけではなく、その周辺にもいくつかの教会があったようです。パウロのエペソ伝道を記した使徒の働き 19 章 10 節を見ると、ティラノの講堂でのパウロの福音宣教が 2 年続いたので「アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた」と記されています。また同じ章の 26 節には、アルテミス神殿の模型を作り、職人たちにかかなりの収入を得させていた銀細工人デメテリオが、商売が上がったりになったとして次のように人々を扇動した言葉が記されています。「あのパウロが、手で造った物は神ではないと言って、エペソだけでなく、アジアのほぼ全域にわたって、大勢の人々を説き伏せ、迷わせてしまいました。」コロサイ人への手紙 4 章 13 節を見ると、エペソ周辺にコロサイ、ラオディキヤ、ヒエラポリスなどの教会があったことがわかります（1 世紀終わり頃に書かれたヨハネの黙示録にはさらにアジアの 7 つの教会のことが出て来ます）。そのようなアジアにある諸教会が、エーゲ海の向こう側、ギリシャの地にあるコリント教会によろしくと挨拶を送っています。

次に出て来るのはアキラとプリスカ。この二人は聖書の色々な箇所に出て来る有名な夫婦です。最初に出て来るのは使徒の働き 18 章 2～3 節で、第二次伝道旅行、パウロが初めてコリントに来た時、この夫婦に出会いました。彼らはクラウディオ帝によるユダヤ人ローマ退去命令によって、そこに来ていました。パウロは前の宣教地アテネでの宣教が思うように行かず、心にかかる色々なことがありながら、一人さみしくコリントにやって来たのですが、この夫婦との交わりによって大いに力づけられました。この夫婦はパウロと同じ天幕作りをする同業者で、パウロは同じ家に住み、一緒に生活をしながら福音宣教をしました。その後、パウロがエペソを通過してエルサレムに戻る時、このアキラとプリスカ夫妻もエペソに来ました。そしてパウロ不在の間、

アポロに会い、彼の知識の欠けているところを満たす奉仕をしたことが使徒の働き 18 章後半に記されています。そして次の 19 章、第三次伝道旅行でパウロが集中的にエペソ伝道を行った時も、この夫婦はエペソにいて、自宅を開放し、家の教会を開いていたことがここから分かります。その彼らからのよろしくという言葉もここに書き留められています。ちなみにパウロがこの後、記したローマ人への手紙からはアキラとプリスカ夫妻がローマに住み、そこでも家の教会を開いていたことが分かります。またパウロが殉教直前にテモテに宛てた第二の手紙からは、この夫婦が再びエペソにいたことが分かります。ビジネスのために世界各地に住みながら、伝道の最前線で立派な働きをしたこの夫婦のことが複数の手紙から浮かび上がって来ます。

そして 20 節では「すべての兄弟たちが、あなたがたによろしく」と記されます。この「すべての兄弟たち」とは、前に述べられた人たちも含むのか含まないのか議論がありますが、含まないとすればパウロのすぐそばにいた人たちで、アキラとプリスカ及びその家の教会のメンバーを除く人たちのことなのでしょう。その彼らも「よろしく」と挨拶を送っています。改めて教会はこのような拮がりの中に生かされていることを覚えさせられます。一つの地域にある一つの会衆で教会は完結するのではないのです。純粋な単立教会、単独教会というものは聖書にありません。神は色々な場所で働きをなさっていて、それらの教会は本質的に主にあって一つです。その交わりを喜び、尊び、互いに励まし合い、神のみわざをたたえ合って、ともに歩むようにと私たちは召されています。

20 節後半はコリント人たちへの言葉です。「聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。」 前に礼拝における女性のかぶり物のことが述べられた箇所を読みましたが、聖書に書いてあるからと言って私たちは全部その通りにしなければならないわけではありません。それは当時の文化において、そのようにすることが自然な表現であったことと関係しました。この聖なる口づけも同じです。当時口づけは尊敬、愛情、感謝を表す自然な表現でした。聖書の色々な記事にその実例を見ることができます。それに「聖なる」という言葉が加えられています。聖徒たちにふさわしい仕方で、その挨拶がなされるようにとパウロは言っています。このことがここで言われた背景にはコリント教会の状況があると考えると意味深いと思います。コリント教会では互いの間に争いやねたみ、見下し合いがありました。そんな彼らにパウロは互いに愛と尊敬と親しさを表す挨拶をせよと言っているわけです。今日の私たちはどうでし

よう。先に述べた通り、私たちは違う文化の中にありますから、これと全く同じようにすることが良いわけではありません。しかしでは私たちは置かれた文化の中で、どのようにこのことを積極的に行うべきか、よく考えて実践することが大切だと思います。たかが挨拶と言ってはなりません。挨拶はやはりお互いへの尊敬や愛情、親しい思いを表すものでしょう。もし私たちが互いに親しい挨拶をしないなら、なぜそうなのでしょう。相手を受け入れていない思いが自分にあるからでしょうか。自分一人のことだけを考えて他の人のことは心にかけていないからなのでしょう。そうして神がせっかく作ってくださっている交わりを尊ばず、むしろ軽んじ、壊す振る舞いをしているということはないでしょうか。パウロはコリント人たちに「聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい」と言いました。私たちはこの挨拶一つに真剣に取り組むことによっても、神が導き入れてくださった霊的家族の交わりを尊び、互いに励まし合い、神をたたえる歩みを御前にささげることができるのです。

さて 21 節からはパウロが自らペンを取って自分の挨拶を記します。他の手紙からも、筆記者が手紙の大部分を記し、最後にパウロが自筆するという習慣だったことが分かります。ですからこの 21～24 節までの 4 つの節のみパウロの筆跡がこの手紙にあったこととなります。彼は自らの字で何を書いたのでしょうか。ここに 4 つのメッセージがあります。

一つ目は 22 節前半の「主を愛さない者はみな、のろわれよ。」いきなり厳しい言葉です。パウロは自らペンを握った直後、まずこれを書きました。ですから特別な思いがここに込められていると考えられます。ここで強調されているのは「愛」です。前回の 14 節でも見ましたが、確かにこの手紙ではこのことが語られて来ました。コリント教会の多くの問題の根底にあったのは一言で言えば愛の欠如でした。彼らは知識や知恵を誇り、それで互いに争い、分裂を引き起こしていました。そんな彼らにパウロは 8 章 1 節で「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」と言いました。また 13 章には有名が愛の章が記されました。そんなパウロは自らペンを取って書く最後の言葉において、クリスチャンの生き方のエッセンスを記したのです。それは主を愛して歩むということです。もちろん愛は私たちからではなく、神から、また主から始まります。しかしクリスチャンはただ神の愛を知り、主の愛を知って、それで終わりではありません。主の愛を受け取って、今度は自分自身が主を愛して生きる者となる。これが信仰生活のエッセンスです。もしそのような生きるならコリント教会の多くの問

題は解決するはずでしょう。彼らは主を愛するよりも自分のプライドやメンツを上
上げて生活していました。そのために争いが起こり、不和が生じていました。しかし
クリスチャンは何よりも主を愛して生きる者たちである。そのようにせず、主を愛さ
ない者はみな、呪われよ！とパウロは言います。主を愛さないとは、主の愛に応答し
ないということであり、つまり主を無視し、主を拒絶しているということの意味しま
す。その人はのろわれよ！とパウロは言います。

続けて二つ目の言葉、「主よ、来てください」と主の再臨を求める祈りが記されま
す。一見、唐突にも思われますが、そこにはやはりつながりがあると考えられます。
やがて主は再びこの世に来られます。その日こそ救いが完成する日であり、私たち
にとって慰めの日です。その日を見つめて、この祈りを祈り、自分の歩みを整えるのが
信仰者、クリスチャンです。しかしもし主を愛さない歩みをしているならどうでしょ
う。それはそのままでは済みません。やがて主が来られてさばきが行われます。「主を
愛さない者はみな、のろわれよ」と言われた言葉が究極的に実現することとなります。
私たちは果たして「主よ、来てください」と日々祈る者でしょうか。主を愛して生き
る人は平安と期待をもってこれを祈るでしょう。主よ、来てください。一日でも早く
来てください、と。しかしもしこの祈りを祈ることに躊躇を覚えるなら、それはなぜ
でしょうか。それは主を愛して歩んでいないからでしょうか。このパウロの言葉を通
して主を愛するというクリスチャンの基本となる歩みへ導かれたいと思います。そし
て日々「主よ、来てください」と祈る者へと整えられたいと思います。

三つ目は23節の「主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」 パ
ウロの多くの手紙の一番最後に出て来る祈りです。この手紙でも冒頭の1章3節でコ
リント人たちのために恵みが祈られました。そして最後にもう一度恵みが祈られてい
ます。クリスチャン生活とは初めから終わりまで恵みによること、主の恵みに負うて
いること、そのことが告白され、祈られています。

しかしこの手紙の特徴はもう一つその後に言葉が加えられていることです。24節に
「私の愛が、あなたがたとともにあるように」とあります。こんな終わり方をする手
紙は他にありません。とても珍しい終わり方です。そしてここでも「愛」が強調され
ています。ここに示されているのは、パウロは愛について人に勧めているだけではな
いということです。パウロ自身、コリント人たちを愛していました。その愛によって

彼はこの手紙をここまで書いて来ました。色々厳しい言葉も語って来ました。しかしそれもすべて愛によって書いたことでした。4章14～15節：「私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。たとえあなたがたにキリストにある養育係が万人いても、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」21節：「あなたがたはどちらを望みますか。私があるあなたがたのところに、むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか。」

また彼は「私の愛が・・・あなたがたすべてとともにありますように」と言っています。自分を良く思ってくれる人たちにだけではありません。パウロに反対し、パウロを批判するような人たちも含めて「私の愛があなたがたすべてとともに」と言われています。

そして原文で最後にあるのは「キリスト・イエスにあって」という言葉です。パウロはここでコリント人に対する自分の愛を証ししていますが、その愛はキリスト・イエスにある愛であるということです。キリストに導かれてパウロはこの手紙を書き、自らの愛を届けています。その自分の愛を証ししつつ、すべてを導いてくださっているのはキリストであることを仰いで、キリストの名を最後に書き記し、キリストを礼拝し、キリストに栄光を帰して筆を置いたパウロなのです。

この結びの言葉を前に私たちはどうでしょうか。特に彼が強調した愛についてどうでしょうか。二つのことがここに言われました。一つは「主を愛さない者はみな、のろわれよ。」クリスチャンとは主の愛を知り、主に感謝し、自らも愛をもって主に応答する人です。生活すべてが主への愛で特徴づけられる人です。私たちは主を愛して生きている者でしょうか。自らをもう一度点検したいと思います。そして主を愛している者として、主に喜ばれる歩みをいつも第一に選び取る信仰者の歩みへと整えられたいと思います。

もう一つは主を愛する者としてお互いを愛するということです。パウロは最後に「私の愛があなたがたすべてとともにあるように」と言いました。私たちも主の愛を受け、主の愛に生かされている者として、今度は「私の愛」を、神の家族であるすべ

ての兄弟姉妹に、また周りの方々に届ける者となるべきです。今週7日（金）は主の十字架を覚える受難日です。主は私たちの救いのために何をしてくださり、どこまでその身を沈めて仕えてくださったのか、そして私たちをどんなに豊かないのちに今日も生かしてくださっているかを見つめ、主を愛する歩みへとさらに導かれないと思いません。そしてキリスト・イエスにある「私の愛」を周りの方々すべてに届け、キリストの愛を証しし、この方のもとにある真の救いと幸いへ招く神の教会の歩みを導かれてまいりたいと思えます。